

令和 5 年 5 月 17 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00573

研究課題名（和文）ハンガリー語動詞接頭辞の文法化とモダリティの意味

研究課題名（英文）Grammaticalization and modality of Hungarian verbal prefixes

研究代表者

早稲田 みか（Waseda, Mika）

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・名誉教授

研究者番号：30219448

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：ハンガリー語の動詞接頭辞 *meg* は、「うしろへ」という移動の方向を表す語彙的要素が文法化して完了アスペクトを付与する機能的要素へと文法化したとされている。この動詞接頭辞 *meg* の意味用法を調査した結果、「ついに」「やっと」「うっかり」などといった話者の事態にたいする感情や評価が表現されている事例が観察された。これは完了アスペクト付与からモダリティの意味あるいは語用論の意味が派生していると考えられ、日本語の「てしまう」の用法との共通点があることも確認できた。この事象は、文法化とは分けて、主観化による語彙化と捉えるべきで、内容語から機能語へと文法化の「一方向性仮説」に対する反証になりうる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義としては、ハンガリー語の動詞接頭辞が文法化によって完了アスペクトを表すようになり、さらにそこからメトニミーにより、完了した出来事や行為と同時に生じる話者の感覚や感情、評価が結びついて、モダリティの意味を派生していること、日本語の「てしまう」との共通性があること、文法化や主観化、語彙化など、広く言語一般に観察される言語変化のメカニズムに普遍性があることなどが指摘できたことがある。社会的意義としては、ハンガリー語の記述、ハンガリー語・日本語辞書の作成、および日本におけるハンガリー語教育において実践的に役立つことができることが挙げられる。

研究成果の概要（英文）：The Hungarian verbal prefix "meg" had a directional meaning ('backward') and originally functioned as adverbial, but it has grammaticalized and it now functions as pure perfective marker. Examining the meanings of the "meg" sentences however, it became clear that the "meg" has various modal meanings such as 'finally, at last, carelessly, accidentally', similar to the Japanese 'teshimau' expressions. The phenomenon can be analyzed as lexicalization process caused by the subjectification, which could be contrary evidence against the unidirectionality hypothesis in grammaticalization.

研究分野：ハンガリー語学

キーワード：ハンガリー語 動詞接頭辞 文法化 一方向性仮説 モダリティ

1. 研究開始当初の背景

ハンガリー語の動詞接頭辞は、意味的にも統語的にも記述が困難で、学習上も習得がきわめて難しい文法カテゴリーである。とりわけ、その意味と機能は非常に多様かつ多義的である。しかし、一見かなりかけ離れているように見える異なる意味の背景に、なんらかの必然的関係性があることが明示できれば、ハンガリー語教育や辞書の記述にも役立つと考え、英語の場所関係を表す前置詞の分析に使われている認知意味論的枠組みを応用して、ハンガリー語動詞接頭辞の分析を実施した。その結果、ハンガリー語の動詞接頭辞の多義的用法は、もっとも基本的な空間的用法(基本的イメージ・スキーマ)からメタファーやメトニミー、視点の移動、焦点化、背景化などによって意味拡張され、時間をはじめとする抽象的な関係、さらに完了アスペクトを付加する機能に拡大され、文法化していったと考えられることが確認できた。また、動詞接頭辞の移動の方向を表す語彙の意味が希薄になり、文法の意味を獲得する文法化のプロセスは、構文変化を引き起こすこと、すなわち、完了アスペクト機能をもつ接頭辞が付加した動詞の構文は、定まった目的語を必須項としてとる傾向があり、意味と構文が密接に関連していることもわかった。

さらにこの研究の過程で、完了アスペクト機能を有する動詞接頭辞には、単に動作や状況の完了を表すだけでなく、「微妙なニュアンス」を付加する役割があることが明らかとなった。この微妙なニュアンスは、動詞接頭辞の文法化により背景化された過程(移動プロセス)が活性化された結果であると説明できることがわかった。すなわち、動詞接頭辞 **meg** は語源的にみると、もともと「うしろへ」という意味を有していたが、それが背景化されて、「うしろへ」の意味はほとんど完全に失われて、主として完了を表す機能のみをもつようになったが、それに比べ、動詞接頭辞 **el** は主に完了を表す場合においても、本来の「離れて」あるいは「遠くへ」という方向を表す意味が活性化されることにより、「遠くからはるばる」といったニュアンスが付加されるのである。しかし、一連の研究の過程で、もっとも文法化が進んでいるとされる動詞接頭辞 **meg** にも完了アスペクト付与だけではなく「微妙なニュアンス」を付加する機能があるのではないか、それはモダリティ的意味なのではないのかという疑問が生じ、これを明らかにしたいという思いに至った。これが本研究に至った研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

ハンガリー語動詞接頭辞 **meg** は、「うしろへ」という移動の方向を表していた語彙的要素が、文法化して完了アスペクトを付与する機能的要素へと変化したとされている。この文法化した動詞接頭辞 **meg** の用法には、しかしながら、上述したように、完了アスペクト付与だけでは説明できない「微妙なニュアンス」が伴うことがある。本研究の目的は、日本語の「～てしまう」の用法と比較しながら、この微妙なニュアンスが、「ようやく～する」「なんとか～する」などといった話者の達成感、話者の事態にたいする感情や評価であることを主張し、完了アスペクト付与からモダリティ的意味あるいは語用論的意味が派生していることを検証することである。そして、この事象が内容語から機能語へとという文法化の「一方向性仮説」に対する反証になりうる可能性を、脱文法化、語彙化、主観化との関連から考察する。最後に成果をハンガリー語教育に還元する方法を考案する。

3. 研究の方法

接頭辞なしと接頭辞つき動詞の使用において、「ようやく」や「ついに」といった副詞との共起の頻度に有意な差があるか否か、完了アスペクトからモダリティ的意味あるいは語用論的意味が派生することはいくらあるかを調査した。具体的には、使用頻度の高い動詞(主に移動や状況の変化を表す動詞およそ100語)について、接頭辞 **meg** がついていない場合、ついていない場合、および **meg** 以外の異なる動詞接頭辞が接続した場合の用例を収集し、意味用法の総合的な記述を行い、比較検討した。前後関係がわかるように、ストーリー性のある文学作品やハンガリー言語学研究センターのコーパス Magyar Nemzeti Szövegtár (<http://corpus.nyud.hu/mnsz/>) などを使用した。例文の意味解釈の妥当性については、ハンガリー語母語話者に判断を依頼し、研究の方法や方向性については、ハンガリー言語学研究センターやブダペストのエトヴェシュ・ローランド大学のハンガリー語研究者に意見やアドバイスを求めた。

完了アスペクト標識としての動詞接頭辞 **meg** がモダリティ的意味をもつに至るプロセスは、内容語から機能語へと変化する文法化の「一方向性仮説」に対する反証になりうるを検討した。文法化(grammaticalization)とは、簡単にいうと内容語から機能語への変化であり、統語的自立性の喪失や意味の抽象化を伴う現象である。この変化がたどる方向性は、形式的にも統語的にも意味的にも、元のものと比較して縮小化、抽象化の道を進むものであり、逆ではない、ということが、「一方向性仮説」として提示されている。この「文法化」と「一方向性仮説」について、一般的にどのような議論がなされているのか、および、日本語の「てしまう」についての文献を収集し、ハンガリー語動詞接頭辞 **meg** との比較検討、調査を行った。

4. 研究成果

(1)ハンガリー語動詞接頭辞のモダリティの意味については以下のような事例があることが確認された。

動詞 jön「来る」に接頭辞 meg がついた megjön と接頭辞 el「離れて、遠くへ」がついた eljön について、コーパスや小説などを利用して、どのような文脈で使用されるかを調査した。その結果、meg は「ちょうど」や「まさに」といったニュアンスがある一方、el は「ようやく」や「はるばる」といったニュアンスがあることが確認された。これは、meg が移動・変化の最終局面に焦点を当てる機能を有しているのに対して、el は移動・変化の過程にも焦点をあてる機能があるためであると説明できる。両者の意味の微妙な差異は、文法化の程度および移動・変化の過程の活性化の程度と関連していることがわかった。

動詞 vesz「買う」と、それに接頭辞 meg がついた megvesz の用法を比較した結果、megvesz には何かを買うまでの過程が含意されることがわかった。例えば、ジュースを買う行為に比較して、車や家を買う場合には、購入に到るまでにあれこれ比較したり検討するなどといった前提が想定される。meg はそうした過程をへて、それがある故に、「ついに」「やっと」といったニュアンスが加わることが多く、日本語のまさに「買ってしまった」に相当する場合もあることがわかった。

動詞 talál「見つける」と、それに接頭辞 meg がついた megtalál の用法を比較した結果、megtalál は何かをさがして、その結果見つけるという意味になり、偶然見つけた場合には使用されない。見つける行為に至るまでのさがす行為が前提となっており、そのさがす行為が長く困難な場合には、「ついに」「やっと」といったニュアンスを伴うことがあることがわかった。

動詞 ég「焼ける、燃える」に meg が接続した megég は、「なにかが焼け焦げて使えなくなる」「食べ物がちょっと焦げる(食べられないほどではない)」、あるいは「火傷をする」という意味になり、すべてが完全に燃えてしまうわけではない。すべてが焼ける場合には 接頭辞 el「離れて、遠くへ」がついた elég「原型をとどめないほどに燃え尽きる、焼失する」や接頭辞 ki「外へ」がついた kiég「原型を残し、内部が焼失する」、接頭辞 le「下へ」がついた leég「焼け落ちる、焼け崩れる」などが使用されることがわかった。

動詞 vág「切る」に meg が接続した megvág は、「指や首などをうっかりちょっと切る、傷つけてしまう」という意味がある。「完全に切断する」という意味は接頭辞 el「離れて、遠くへ」がついた elvág を使用する。これはまさに「てしまう」の「動作主体が意志を持って行為を行い、あるいはコントロール不可能な状況下で行為を行い、その結果話し手が残念な気持ちになること」という〈遺憾〉や〈本意〉のモダリティの意味と一致していることがわかった。

以上のように、調査の結果、ハンガリー語動詞接頭辞 meg は、単に完了アスペクトを付与するだけでなく、さまざまな微妙な意味のニュアンスを与えることが明らかとなった。そうした微妙なニュアンス(「ついに、やっと、うっかり」など)は、いずれも事態に対する話者の判断や評価である。こうしたモダリティの意味は基動詞の意味や文脈、meg 以外の他の動詞接頭辞との意味の差異などから生じており、固定された意味というよりは、発話状況を含めた文脈によって、その都度実現する語用論の意味と考えられる。

(2)日本語の「てしまう」表現と比較した結果、以下のようなことがわかった。

日本語の「てしまう」は、「しまう」(片付ける)という語彙範疇に属する内用語が意味内容を喪失し(意味の漂白化)、従来とは異なる文脈で使用されるようになり(用法の拡張)、形態統語的特徴を失い(脱語彙範疇化)、「しちゃった」のように音が変化した(音声的弱化)用法もある。本動詞「しまう」では有していた統語的自立性を喪失し、意味も抽象化しており、文法化を経て生じた形式である。文献調査により、この「てしまう」形式は、従来の研究では〈完了〉や〈実現〉といったアスペクトの意味を表すものとされてきたが、近年では〈一掃〉、〈遺憾〉、〈後悔〉、〈本意〉、〈反期待〉などといった話し手の評価や感情的意味、すなわちモダリティを表す形式として考察されていることがわかった。文法化において意味が変化するとき、事象や状況の現実世界のあり方を表す意味から、話し手の信念や態度を表す主観的な意味へと変化することを「主観化(subjectification)」というが、「てしまう」のモダリティの意味はこのような主観化の結果生じたと考えられる。

ハンガリー語動詞接頭辞 meg も「うしろへ」を表す内容語から完了アスペクトを表す機能語へと文法化しており、そこから主観化により上記のようなモダリティの意味が派生していると考えられる。「てしまう」のモダリティの意味は、〈限界達成にともない生じる話者の感情・評価の表現〉ということになり、この点でもハンガリー語動詞接頭辞 meg との共通性が確認できた。しかし、ハンガリー語動詞接頭辞 meg はその完了アスペクト的用法が典型的な用法であり、モダリティの意味も〈達成感〉であることが多いのに対して、「てしまう」の方は常になんらかの主観の意味が関与しており、その意味もより多様である。ただ非常に興味深いことに、ハンガリー語の megvág は、「指や首などをうっかりちょっと切る、傷つけてしまう」の意味になり、〈遺憾〉、〈本意〉といったモダリティの意味を有している。このような事例が他にもないか調査する必要がある。またこのモダリティ意味がどのように生じているのかを検討することも今後の課題である。いずれにしても、日本語の「てしまう」とハンガリー語動詞接頭辞 meg の共通性および類似性を指摘することができた。

(3)文法化の「一方向性仮説」については再考すべき余地があるという結論に至った。「文法化」には、一定の規則性があるとする「一方向性仮説」が指摘されており、これは言語一般に普遍的

に見られる現象であるといわれている。近年、この主張の妥当性に関して議論が行なわれている。例えば Ramat (1992) は、文法化に逆行する脱文法化 (degrammaticalization) と言えらる現象を多く集め、文法から語彙へという、文法化研究が仮定する方向とは逆方向の変化の可能性を指摘している。一般に文法化の過程のなかで、主観化によってモダリティ的意味が生じると言われているが (Hopper and Traugott:2003)、新たな意味が付加されるのであれば、主観化は文法化とは異なる変化と捉えた方がわかりやすい。ハンガリー語の動詞接頭辞 *meg* の用法において、〈完了〉といったアスペクト的意味から、〈達成感〉や〈達成に対する評価〉あるいは場合によっては〈遺憾〉〈不本意〉といったモダリティ意味が派生するのは、語の本来の意味が希薄化するというよりは、新しい語用論的な意味が付加されると言えるので、単純な「一方性仮説」に反するものと捉えることができよう。しかし、主観化による語彙化が文法化の逆方向の変化と言えらるかというところもまた疑問である。むしろ新たな方向への変化であり、文法化を経由して派生すると考えた方が適切だと思われる。これについては、さらなる検討が必要である。

(4)〈完了〉といったアスペクト的意味からモダリティ的意味が派生するメカニズムは、メトニミーで説明できる。完了した出来事や行為と同時に生じる話者の感覚や感情が結びついた結果、〈達成感〉や〈達成に対する評価〉として「ついに」「ようやく」といったモダリティ意味が付加される。しかし、*megvág* には「指や首などをうっかりちょっと切る、傷つけてしまう」の意味があり、〈遺憾〉〈不本意〉といったモダリティ的意味を有することに関しては、それだけではなく、他の動詞接頭辞つき動詞の存在が関係していると考えられる。つまり、接頭辞 *el* 「離れて、遠くへ」がついた *elvág* 「切り離す」、接頭辞 *le* 「下へ」がついた *levág* 「切り落とす」、接頭辞 *ki* 「外へ」がついた *kivág* 「切り取る」などが存在し、それぞれがさまざまに異なる意味を互いに分担していることが関係していると考えられる。*megvág* に〈遺憾〉〈不本意〉のモダリティ意味がある理由については今後の課題である。いずれにしても、ハンガリー語には *meg* 以外にもさまざまな意味をもつ動詞接頭辞が存在し、基動詞と接頭辞の種類によって、さまざまに異なる多様なモダリティ的意味が観察され、*meg* 以外の動詞接頭辞もさまざまに異なるモダリティ的意味を有していることが明らかとなった。

〈引用文献〉

Hopper, Paul J. & Elizabeth Closs Traugott (2003) *Grammaticalization*, Cambridge University Press.

Ramat, Paolo (1992) Thoughts on degrammaticalization, *Linguistics* 30, 549-560.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 6件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Waseda Mika	4. 巻 2022
2. 論文標題 Esterhazy Peter, vagyis magyar irodalom Japanban	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Kulorszagi konyvespolcokon - Tanulmányok Esterhazy Peter idegen nyelvű recepciójáról	6. 最初と最後の頁 311-319
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Mika Waseda	4. 巻 1
2. 論文標題 Predicative possessive constructions in Japanese, English and Hungaria	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ハンガリー研究	6. 最初と最後の頁 37-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Waseda Mika	4. 巻 1
2. 論文標題 Hogyan tanitsuk? - a tanarok szobaja vs. a tanarok szobajuk	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 THL2 a magyar nyelv és kultúra tanításának szakfolyóirata	6. 最初と最後の頁 63-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Waseda Mika	4. 巻 1
2. 論文標題 Ket nyelv között - Mai magyar irodalom japanul	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Magyarországi és japán kapcsolatok az elmúlt évtizedek tükrében	6. 最初と最後の頁 111-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Waseda Mika	4. 巻 10
2. 論文標題 A Kulturaspecifikus kifejezesek forditasi nehezsegei a magyar szepirodalom japanra forditasakor: Esterhazy Peter es Krasznahorkai Laszlo szovegeinek forditiasa	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Spectrum Hungarologicum	6. 最初と最後の頁 37-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Waseda Mika	4. 巻 3
2. 論文標題 Apologising, Refusing, and Thanking in Hungarian and Japanese: Different Languages and Different Strategies	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 In Focus: Japan - The Legacy of the Heisei Era	6. 最初と最後の頁 171-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Waseda Mika	4. 巻 20-1
2. 論文標題 Egy gondolat bant engemet... Mi a haszna a hungarologianak?	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Hungarologiai Evkonyv	6. 最初と最後の頁 13-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Waseda Mika
2. 発表標題 A magyar mint idegen nyelv
3. 学会等名 Nyelvorzo Szalon (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Waseda Mika
2. 発表標題 Ket nyelv kozott, a mai magyar irodalom japanul
3. 学会等名 Nemzetközi konferencia a magyar japan kapcsolatok felvetelenek 150. evforduloja alkalmabol (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 庄司 博史	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 430
3. 書名 世界の公用語事典	

1. 著者名 中欧・東欧文化事典編集委員会、羽場 久美子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 768
3. 書名 中欧・東欧文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------